

カレッジパークの空に — 米国駐在員現地報告 —

平成一八年度から、私は国立国会図書館の米国駐在員として、また同時にメリーランド大学（UMD）図書館客員スタッフとして、ワシントンDC郊外で働いています。用務は「日本占領関係資料の収集」ですが、これに伴う契約、支払い、物品管理、目録データの作成、関連資料の調査、関係者との打ち合わせなど、業務内容はきわめて多岐にわたります。ときどき日本からの依頼を受け、憲政資料室のレファレンスを支援したり、他の部局課のお手伝いをすることも。

さて、表題に掲げた「カレッジパーク」。ここまで本誌をお読みになった方は、それがUMDの所在地だということにお気づきでしょう。そのUMDが持つ広大なゴルフコースの片隅に、木立に囲まれたモダンな建物があります。これが、米国国立公文書館（NARA）カレッジパーク館。国立国会図書館が取り組む日本占領関係資料収集事業の現場です。現在は、第二次世界大戦時から日本占領期にかけての米陸軍の各部隊の作戦に関する文書が対象です。国立国会図書館所蔵資料となるのはそれらをマイクロフィルム

加藤 祐平



カレッジパークの空に翻る星条旗

ム化したものです。現場での作業を通じてオリジナルに触れることができるのは「役得」と言えますが、オリジナルに比べ保存性に優れたマイクロフィルムの利点に気づかされることもしばしばです。今後も、マイクロフィルムにと



DCダウンタウンにある日系米国人メモリアル。有刺鉄線に絡まったツルが、満開の桜に囲まれている

どまらず、利用と保存を両立できる媒体を模索し続けることは、図書館の責務。そう言うてはいささか気が負いすぎでしょうか。

NARAにおける収集業務の隙を見て、米国内各地へ史料調査に赴くこともあります。ドナルドダックがマスコットのオレゴン大学。ミシガン湖の畔にあるノースウエスタン大学。キャンパスの真ん中をミシシッピ川が流れるミネソタ大学。いずれもすばらしい環境で、このまま学生気分浸っていられたら、などと思ってしまう。

どの機関で何を調べるにも、ひたすら史料を「斜め読み」するのが基本的な作業となります。閲覧室にこもる時間が長いためか、ひと仕事終えて空を見上げたときの清しい気分は、何とも言い表しようがありません。

今年には私にとって入館七年目に当たります。この間、関西館への洋雑誌移転準備や東京本館改修工事に携わり、使命感や調整の重要性というようなマニュアルでは学べない多くのことを、暗黙のうちに先輩職員から教わった気がします。そうしたことが業務を遂行する上で重要であると、当地に赴任して改めて気づかされました。

最後に、DCでの生活について少しご紹介しましょう。仕事の後でもまだ明るい季節には、人波に身を任せてあちこち散策するのが習慣です。気さくな米国人との会話も楽しいですね。夕陽でピンクに染まる議会議事堂。軒を連ねる各国大使館。ケネディセンターから眺めるポトマック川。もはや見慣れた光景ですが、不思議と疲れが吹き飛びます。知らぬ間に、この国に魅了されつつあるのかもしれない。最近よく聴く音楽は、ラフマニノフのピアノ協奏曲第三番。米国にゆかりのある作品とのことです。

(かとう ゆうへい 主題情報部政治史料課)